

「主宰の言葉より」その2―あはれの表現者①―

今瀬 一博

前回は、昭和六十一年対岸誌の「創刊の言葉」の中の「俳句は自然と人間の関わりの中にある」、「感動こそが人の生きる証である」を改めて紹介しました。そして「感動こそが人の生きる証である」の最も有効で確実な方法としてよく主宰が口にする、「現場に立つ」という言葉について、作品を例に考えてみました。今回は、これも主宰が様々な機会に述べてきた、俳句の「あはれ」について、句への詠み込み方を紹介しながら述べてみます。

「あはれ」とは、「ああ、はれ」と心から発する感嘆の声がもとで、うれしいにつけ悲しいにつけ、人物や自然・事物にふれてしみじみと深く身にしみる感じ（旺文社古語辞典）を表現する言葉です。私たちも強い感情が湧いたとき「ああ」と声を発することがあります。言葉を失っている事も多いので、そのようなときは心の中で「ああ」と呟きます。この「ああ」が「あはれ」で、喜怒哀楽様々な感情に対して用います。主宰の創刊の言葉、「感動こそが人の生きる証である」の「感動」の多くは、根底にこの「あはれ」があると云っていいでしょう。また逆に「あはれ」が言葉を失ったときに発せられるものならば、強い感動とはそう簡単に言葉に置き換えられるものではないとも言えます。

主宰は、平成二十五年に松山市で行われた、「第四十八回子規

顕彰全国俳句大会」に講師として招かれ「あはれの表現者」という題のもと、講演を行っています。その冒頭では、高校時代に知った「雁風呂」という季語にまつわる話が語られます。そこでは音楽教師であり俳人でもあった滝豊から、この季語の「あはれ」について聞かされ、強く心を動かされたこと、そしてそれが俳句の道に入る大きなきっかけになった話が語られました。俳句にならなかつたものの、これが日常の中で経験する「あはれ」です。この講演では「あはれ」の例句として次の句を挙げました。

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

正岡 子規

遠山に日の当たりたる枯野哉

高浜 虚子

流れ行く大根の葉の早さかな

高浜 虚子

まさなる空よりしだれざくらかな

富安 風生

冬菊のまとおはおのがひかりのみ

水原秋櫻子

いずれも著名の作ですが、切れ字等で句末を明確に切っているのが、感動則ち「あはれ」の所在は明白です。子規の句なら一片の雲もない筑波山、虚子の一句目なら遠山に日の当たる蕭条たる枯野、虚子の二句目なら目の前を非常の早さで流れている大根の葉のその早さ、風生の句なら真つ青な空からしだれてくるさくら、秋櫻子の句なら冬菊自身が発するひかりに「あはれ」があります。この五句は子規の句をのぞいて一句一章の句です。この五句の内秋櫻子の句以外の四句は「けり」や「かな」といった強い「詠嘆」の切れ字を用います。秋櫻子の句は句末に「のみ」という限定の助詞を用いて同様に強く言い切った句となりました。これらの働きによって、作者の心の中の「あはれ」の所在を明確に示します。私たちの実作の際もこの「けり」「かな」のみの強い言葉を用

いた「黄金を打ちのべたような句」の詠み方は参考になりますが、我を忘れる強い感動は多くありませんので、安易に用いると言葉の強さの分だけ句が重くなります。重くなると今度は読者が引いてしまう事にもなるので、注意が必要です。主宰自身の「あはれ」の句としてはこの時の講演で、退職時の

もう勤めなくてもいいと桜咲く

今瀬 剛一

を挙げます。今までは学校や生徒の事が常に頭の中にあつたのに、ある日ふつと明日からはもう勤めなくてもいいという事に気付いたのです。その心で改めて桜を見たときに湧いた「ああ」という感情がそのまま句になっています。先の五句のような強い切れ字等は用いずに、強い感動、「あはれ」の心が詠まれています。

ところでこの講演では、地元松山の俳人で主宰とも長年親交のあつた、阪本謙二さんに講師紹介をしていただいたり、様々なもてなしをしていただいたそうです。次の句はそれから時が経つてその阪本さんとの思い出を詠んだ作品です。

さらにつくせもういつばいの新走り

「悼・阪本謙二さん」と前書きがあります。この句も「新走り」を見て、瞬時に思いが阪本さんとの思い出に飛び、「ああ」という言葉にならない感慨が押し寄せたのです。

剛一主宰は情の作家という側面が強いので、人間や人間との関わりの中で感じた「あはれ」を詠んだ句は多いと思います。畏友への思いを込めた句に続き人間を詠んだ句を二句紹介します。

雁よりも遠きもの呼び子等走る

今瀬 剛一

着ぶくれし身をすらぬいて足二本

今瀬 剛一

一句目は初期の作品で季語は「雁」。しかし詠まれるのは、目に見えぬ遠いものを呼びつつ走る「子等」で、「あはれ」は一見

見えにくい作品です。この句は「子等」の姿を目の前に見ながら（もつと言えば見なくてもいい）、彼らが雁よりも遙か遠いものを呼んで走る姿が感動の中心でありこの句の「あはれ」です。「雁」の遠さを生かし大きな感動を根底に据えた句と言えます。第二句集『約束』所収の二句目は、能村登四郎が昭和五十五年の「俳句」三月号に寄稿した「あたらしき伝統美の騎手」を紹介します。

ここで登四郎は現代俳句の新しさについて、「俳句という伝統形式を背負った俳句はそんなに急激に新しくなれるものではない」と前置きし、その上で俳句の新しさを求めるには「抑え抑えた中の新しさ」が必要であると言ひ、この句を含む八句を挙げて『約束』の新しさを称賛します。「着ぶくれ」つつしつかりと地に足を付けて立つ「人間」の存在に「あはれ」を感じた句と言えますが、従来の固定化された季語の用い方を越え、新しい人間詠に挑戦する姿勢に登四郎も「ああ」と感じたのでしょうか。

ここまで見てきたように、簡単に言葉に出来ない感動の言葉が「あはれ」です。最後に簡単に言葉に出来ない「あはれ」という語を直接詠み込んだ「あはれ」の作品を二句紹介します。

あはれ子の夜寒の床の引けば寄る

中村 汀女

寒晴やあはれ舞妓の背の高き

飯島 晴子

言葉にならない感動や驚きの際に発するのが「あはれ（ああ）」ですが、直接詠み込む場合には例句のように、その「あはれ」を感じ取ってもらうために、この言葉以外のところはとても具体的に表現します。汀女の句なら、「引かれた床に寄ってくる幼い我が子」に限定し、晴子の句なら「背の高い舞妓」に焦点を当てるなど大変明確です。「あはれ」は簡単にそのまま句に使って成功する言葉ではありませんが、参考にしてほしいと思います。